

ゲイ男性の「乱交志向」について考える

小 高 良 友

[1] はじめに

本稿のテーマは、男性ゲイのいわゆる「乱交志向」について考察することにある。それはまた、一人の同性愛者として私が自分のなかに潜む同性愛に対する偏見について考察することでもある。

ゲイにたいする世間一般の偏見を少しでも無くしたいと21歳で決意し、自分の人生をそのために捧げるべく私はこれまで奮闘してきた。それから約30年という長い廻り道だったかもしれないが、50歳をすぎてようやくその作業に邁進できる環境が整ってきた。そのときに、2006年度ジンメル研究大会での報告の機会をいただいた。

ゲイにたいする偏見をときほぐしていくときの一つの大きな障害となると予想されるのが、男性ゲイのいわゆる「乱交志向」だ。「結婚」という束縛がない分、そして、妊娠の可能性もない分、エイズなどの感染症にたいする配慮さえ怠らなければ、男性ゲイ同士の恋愛の土壌は限りなく広がっている。それは、「男性異性愛者」(以下「男性ヘテロ」と記す)が到底及びもしない広さだ。

男性ゲイが男性ヘテロに恋愛しようとする場合には、実に障害が多くなるばかりか、セックスの実現可能性など希有に等しくなる。しかし、男性ゲイ同士の場合には、事情が違ってくる。お互いの性志向は基本的にはほぼ同じであるから、互いに意気投合できれば、セックスなどやりたい放題である。もちろん恋愛も自由だ。いわゆるゲイホテルに行けば、入館料2,000円ほどで、男性ゲイたちは1日中セックスの相手を求められるし、何回でもセックス可能だ。相手を代えることも不可能ではない。一般世界で不自由な思いをしている分、男性ゲイたちはゲイ

ホテルで思い切り自由を楽しめる。男性ヘテロたちも、女性たちにたいしそのような場があるとしたら、おそらくそこへ殺到するはずだ。しかし、男女の場合には、「妊娠」「結婚」という壁があり、しかも、スポーツ感覚のセックスは男性には受け容れられても、一般的には女性にはなかなか受け容れがたい側面がある。

このような男性ゲイのセックス事情は、特にエイズの出現以来、諸悪の根元のように言われ、誤解と偏見の元になってきたように思われる。それは、ゲイにたいする理解を深めようとするときの大きな障害になると常々私は思ってきたし、ゲイの若手研究者たちもその思いは少なからず共有しているように思われる。

2006年度のジンメル研究大会での報告において、私はゲイの乱交志向についてジンメルを活用して考察してみた。その考察の詳細が本稿以下の[2]である。そのときは、ゲイにたいする偏見について考察したわけではなく、ゲイがどうして乱交志向になってしまうのかを男女差として考察してみた。その考察内容は、簡単に要約してみると、ゲイの乱交志向は、ゲイだけに見られるものではなく、ヘテロもゲイも「男」として共通に見られる志向である、ということになる。これは、私にとっては実に新鮮な発見だったが、この私の報告を聴いた学問の恩師から衝撃的なコメントをいただいた。私の報告は平凡であり、ジンメルをうまく活用していない、というのがその趣旨だ。

私の恩師のこのコメントは私にとってとてもショックであった半面、ゲイについての私の偏見に気づかせてくれる絶好の機会にもなった。その偏見についての考察が本稿以下の[3]である。

[2] 男性ゲイの「乱交志向」について ジンメルから学ぶもの

本節では、ジンメルの論文「男女両性の問題における相対的なものと絶対的なもの」（円子修平・大久保健治訳『ジンメル著作集7ー文化の哲学』1994, 63-101頁）から同性愛研究のためにどのようなことが学べるかを私なりに明らかにしたい。それは、男性ゲイの「乱交志向」についての考察でもある。

私はゲイによるゲイ・スタディーズを志向してきたが、ジンメルの売春論をまとめるさいにジンメルの「男女両性の問題における相対的なものと絶対的なもの」を部分的に読む機会があり、そのさいに、ゲイ・スタディーズにこの論文から示唆されるものがあるように漠然と思われ、それを一度整理してみたいと思っていた。

ジンメルの「男女両性の問題における相対的なものと絶対的なもの」についての日本の先行研究は私の知る限りで以下のようにいくつかあるが、いずれもが、同性愛研究との関連には言及していない。その点でのみ、私の独自性が出せそうだ。

- ①川本格子「ジンメルにおける『絶対的な生』ー二元論的世界の克服」、『ジンメル研究会会報』11, 2006, 27-37頁。
- ②掛川典子「ゲオルク・ジンメルの女性文化論とマリアンネ・ヴェーバーにおける女性の文化的貢献論」、『昭和女子大学女性文化研究所紀要』26, 2000, 23-41頁。
- ③川島知子「ジンメル分化論における女性文化の可能性」、『母子研究』20, 2000, 95-102頁。
- ④石丸純一「G.ジンメルの女性論」、『実践女子大評論』21, 2000, 77-88頁。
- ⑤杉本学「ジンメル男女論における二元論とその統一の問題」、『社会学史研究』21, 1999, 49-61頁。
- ⑥掛川典子「ジンメルの女性論」、『昭和女子大学女性文化研究所紀要』21, 1998, 19-34頁。
- ⑦北川東子「両性具有者の女性論」、『ジンメル：生の形式』講談社, 1997, 91-135頁。
- ⑧掛川典子「日本における女性文化論の基礎(そ

の1)ージンメルの女性文化論」、『昭和女子大学女性文化研究所紀要』18, 1996, 7-22頁。

- ⑨菅野仁「ジンメル『女性文化』論と今日のフェミニズム思想」, 東北社会学研究室『社会学研究』54, 1989, 45-65頁。
- ⑩阿閉吉男「男性文化と女性文化」, 阿閉吉男『ジンメルの世界ー空間・都市・文化』文化書房博文社, 1989, 153-161頁。
- ⑪石塚勝雄「ジンメルの女性論の研究(1)」, 『神戸女学院大学論集』12-1, 1965, 1-13頁。
- ⑫石塚勝雄「ジンメルの女性論の研究(2)」, 『神戸女学院大学論集』13-1, 1966, 15-28頁。
- ⑬石塚勝雄「ジンメルの女性論の研究(3)」, 『神戸女学院大学論集』13-3, 1967, 1-16頁。
- ⑭石塚勝雄「ジンメルの女性論の研究(4)」, 『神戸女学院大学論集』14-2, 1967, 1-22頁。
- ⑮石塚勝雄「ジンメルの女性論の研究(5)」, 『神戸女学院大学論集』15-3, 1969, 1-15頁。
- ⑯石塚勝雄「ジンメルの女性論の研究(6)」, 『神戸女学院大学論集』16-2, 1969, 23-48頁。

ゲイ・スタディーズのほうでは、私の知る限り、記憶の限りでの国内外の研究において、ジンメルのこの論文に言及して考察しているものはない。

男性ゲイ文化の一つとして、ゲイホテルがある。ここでは、男性ゲイたちは他の男性ゲイに確実に巡り会うことができ、意気投合した相手とは性交渉を持つことができる。ここで、その後の交際相手を見つけるものもいれば、その場限りの交際相手を探すものもいる。性交渉を持っても男同士であれば妊娠の心配はないため、しかも入館者はまずゲイに限られるため、男性ゲイたちは館外の世界から「解放」される。性的に欲求不満になっても、ここでなら自由に相手を探すこともできるし、相手が見つければ1日何度でも性交渉することも可能だ。お金で相手を買うわけではなく、2,000円程度の入館料を支払えば、それ以外には無料で相互の合意のもとで「セックスやり放題」も不可能ではない。

一般に女性版ゲイホテルは聞いたことがなく、あったとしても数的には希少なはずだ。それにひきかえ、男性版ゲイホテルはここ30年

来、多少の浮き沈みはあるものの、継続的に経営がなりたってきた。この差異は何なのか。

また、男性ゲイの世界では、カップルの交際期間が短いことも仲間同士で体験的に言われていることである。おそらく女性ゲイ同士のほうが交際期間は長いはずであるが、それはどうしてなのか。

あらためて本節の問題意識を整理すると

- ①ゲイ男性同士の交際はなぜ長続きしないのか
- ②ゲイホテルが繁盛しているのはなぜなのかということになるか。

(1) 総論

ジンメルは、男は性的に女性を愛するということを前提にして議論しているが、ジンメルが男性に言及するさいに、相手の「女性」を「男性」に置き換えると、ジンメルの男性論がそのままゲイ男性論になる。そう読んでも違和感がない。

世間一般では、ゲイ男性は「女として」男を愛すると思われがちであるが、私自身は「男として」男を愛すると思ってきたし、私が見てきたゲイの男たちの多くもまずそうであった。

今回、ジンメルの論文「男女両性の問題における相対的なものと絶対的なもの」に接して、私は「男として」男を愛してきたのだと再認識できた。

(2) 各論 1—ジンメルの見解

ジンメルの「男女両性の問題における相対的なものと絶対的なもの」のなかで、私が注目したいジンメルの見解は次の5点だ。いずれも訳書からの引用である。

- ①性的欲望の充足は男性をその関係から解放し、女性をその関係にむすびつける志向をもつ。一般的な経験が語るように、女性は男性に身を任せるときにいっそう彼を愛するようになる。しかし、男性が自分に身を寄せた女性にたちまちまったく無関心になることもまた一般的な経験である¹。
- ②男性にとっては性の問題は関係の問題であり、それゆえに、その動機をなす衝動が鎮められて、男性がそれ以上その関係に関心をも

たなくなるやいなや、消滅する²。

- ③男性における絶対的なものは彼の性的なものとむすびついていない。女性にとって性の問題は本質的な問題である³。
- ④宇宙的な原理としての性もしくは性愛という絶対的なものが、男性にとっては女性にたいするたんなる関係になり、両性のあいだの関係としてのこの分野のもつ相対性が、女性にとっては絶対的なもの、女性の本質の不変なものになる⁴。
- ⑤性的興奮が本質全体の動静化ではなく、部分機能の問題にすぎないために、性的に女性よりはるかに興奮しやすい存在である男性は、性の現象化のためにきわめて一般的な刺激を必要とするにすぎない。こうしてわれわれは、女性はむしろひとりの男性に、男性はむしろ女性一般に愛着する、という経験上の事実を理解できるのである⁵。

上記の①と②、③と④は、それぞれ内容的には同じことを少し違った形で表現していると思われるため、上記の5点は内容的には3点にまとめられようが、一部内容が理解しづらい点があり、また、ジンメルの指摘内容をより理解しやすくするために、5点を引用した。

以下での便宜のために、上記をもう少し短く整理してみよう。

- [a] 性的欲望の充足は男性をその関係から解放する。
- [b] 男性における絶対的なものは彼の性的なものと結びついていない。
- [c] 性的に女性よりはるかに興奮しやすい存在である男性は、性の現象化のためにきわめて一般的な刺激を必要とするにすぎない。

(3) 各論 2—私の疑問とジンメルの見解との関係

ジンメル見解 [a] [b] によれば、男は自分の大事なものをセックスに投入するわけではないから、セックスをしても、それ以上の関心を相手に持てなければ、一人の男にそれほど執着はしない。一度寝てしまえば、男性ゲイはまたすぐに次の男を捜しがちだ。

自分はヘテロセクシュアルだと思い込んでい

る男が、射精さえさせてもらえれば相手が男でも場合によっては寝てしまえるのも、ジンメル見解 [c] で説明可能だ。

ゲイホテルとは、そのような男たちにとって、実に便利な場所であるわけだ。男同士であるぶん、上記3点 [a] [b] [c] がいつそう強化されあう場がゲイホテルなのだろう。

ゲイ同士で交際しても長続きしないのは、[a] [b] [c] の上記3点を踏まえれば、予想がついてくる。相手と性的欲望を満足させられれば、それ以上相手に何かを感じられなければ、また、自分が相手に別のものを提供したいと思わなければ、男同士で関係を保つのはむずかしくなる。一人の男に執着しなくても性的興奮は可能だ。

(4) 本節考察の限界

本節冒頭で紹介した関連文献の⑪～⑬で石塚勝雄はジンメルの「男女両性の問題における相対的なものと絶対的なもの」が難解な作品であると指摘している。もともとジンメルの作品は私にとってすべてが難解であるが、この作品も特に難解であった。何度も読み返したが、そのすべてが理解できているわけではなく、私が注目したジンメルの論点も、私が使用した訳書と石塚勝雄訳とでニュアンスが食い違う箇所があったり、両者を読み比べてもいまひとつ内容がわかりにくい箇所もあった。それでも要点ははずしていないだろうと思いながら私の関心にひきつけた。

本節で着目したジンメルの論文は、私が着目した論点以外の豊富な内容を含んでいる。何とか理解できた一部に着目して自分の関心にひきつけてジンメルのこの論文を読んだわけであるが、この論文の本筋をはずしている可能性は残る。しかも私は原著にあたっていない。

ジンメルのこの論文は、性差論を論じているため、いわゆる「男女本質論」にあたるようだ。上記 [1] で紹介した関連文献の論者たちの多くはこの点に警戒しながらジンメルの作品を読んでいるが、私はその点には深入りせずに、当面自分の関心にジンメルのこの論文がどのように役立ったのかだけに焦点をあてて本節を組み立てた。

[3] 自分のなかの同性愛偏見を考える ——一人のゲイとして——

本節は、一人の同性愛者として自分のなかに潜む同性愛に対する偏見について考察したものである。

18歳でゲイであることのカミングアウトを果たして以来、少なくとも54歳になった現在の自分のなかには同性愛にたいして偏見などないと私は思ってきた。ところが、2006年度ジンメル研究大会での報告をきっかけに、ゲイについて自分のなかにひとつの偏見が存在していることに気づいた。その偏見については、日本の他文献で言及されていない可能性があり、私にとっても新鮮なことであり、世間においてゲイ理解を進める上でもひとつの意味があると考え、以下でそれをときほぐしてみようと思う。

本節設定のきっかけになったのは、冒頭に述べたように、前節のような報告を2006年度ジンメル研究大会で私が行い、それを聴いた私の学問の恩師からいただいた講評である。

(1) 私の中のゲイ偏見とは何か

前節のような報告を聞いた私の恩師は、私の報告を評して「平凡である」といった趣旨の発言をされた。男なのだからゲイとはいえ「乱交志向」があっても不思議ではない、と恩師は言いたかったのであろう。しかし、私はジンメルの作品を通してそのことに気づくまで、そのことに気づくことができなかった。また、そのことに気づくや否や、とても「解放」されたような気分になった。男なのだからゲイとはいえ「乱交志向」があっても不思議ではないとするならば、世間からの理解もある意味では多少とも得られる可能性があるかもしれない、と思ったわけだ。また、「乱交志向」という意味でも自分はある意味で「異常」ではなかったのだ、とも思えた。

私は、ゲイの「乱交志向」が男性ゆえの特性ではなく、ゲイゆえの特性だと思い込んできた。そこに大きなひきめを感じてきた。それが「偏見」だったことにジンメルは気づかせてくれたし、恩師が気づかせてくれたわけだ。もちろん、

ジンメルは男女間の一般論を展開しただけであり、ゲイについて発言したわけではない。

性志向が「より女性に」向くか「より男性に」向くかだけの違いしかゲイとヘテロの間には相違がないと思ってきた私が、こと「乱交志向」についてはゲイとヘテロとで男性でも違いがあると思い込んできた。これは私にとっての「偏見」であった。

(2) ヘテロ男性からは見えないもの

「乱交志向」に男女差が本当にあるのか、それ自体が厳密には議論の対象となりうると思うが、少なくとも私が生きてきた約 50 年の範囲の日本ではそのように一般には理解されているように思われ、自分が見聞きしたり体験してきた範囲でもおおよそそれが成り立っているように思われる。「乱交志向」はゲイでもヘテロでも男性に共通のもの、このことにどうして私は気づけなかったのだろうか。それほどゲイにたいする社会からの「抑圧」は強かったようだ。そのような抑圧などものともしないと思ってきた私であったが、それでもこのざまである。

しかし、私の恩師はそんな私の胸中をどこまで見抜いておられたのであろうか。群を抜いた洞察力を持つ私の恩師でさえもしそのことが見えていないとしたら、世間一般のヘテロからはもちろんそのことが見えていないのであろう。

[4] おわりに

日本語で読める単行本に限ってのことではあるが、ゲイに関するそれらのうち、私が約 30 年のうちに入手できた単行本の限りでは、ゲイに関して不足していると思われる研究領域のひとつは、当事者としてカミングアウトした「既婚」研究者がゲイについて考察した研究であり、ひとつは、男性ゲイの「乱交志向」についての考察であると思われる。私の前作 2 点⁶はこの前者を埋めるものであるが、本稿は前者と後者を意識して書かれたものである。

[註]

1. G. ジンメル「男女両性の問題における相対的なものと絶対的なもの」, 円子修平・大久 保健治訳『ジンメル著作集 7 - 文化の哲学』白水社, 1994, 63-101 頁, 69 頁。
2. 前掲書 69 頁。
3. 前掲書 70 頁。
4. 前掲書 70 頁。
5. 前掲書 71 頁。
6. 小高良友「ゲイ・カミングアウトの社会学をめざして - 自分の事例をてがかりに」, 『東海女子大学紀要』24 号, 2005, 59-69 頁。
小高良友「『ゲイの結婚』について考える」, 『東海女子大学紀要』22 号, 2003, 45-49 頁。